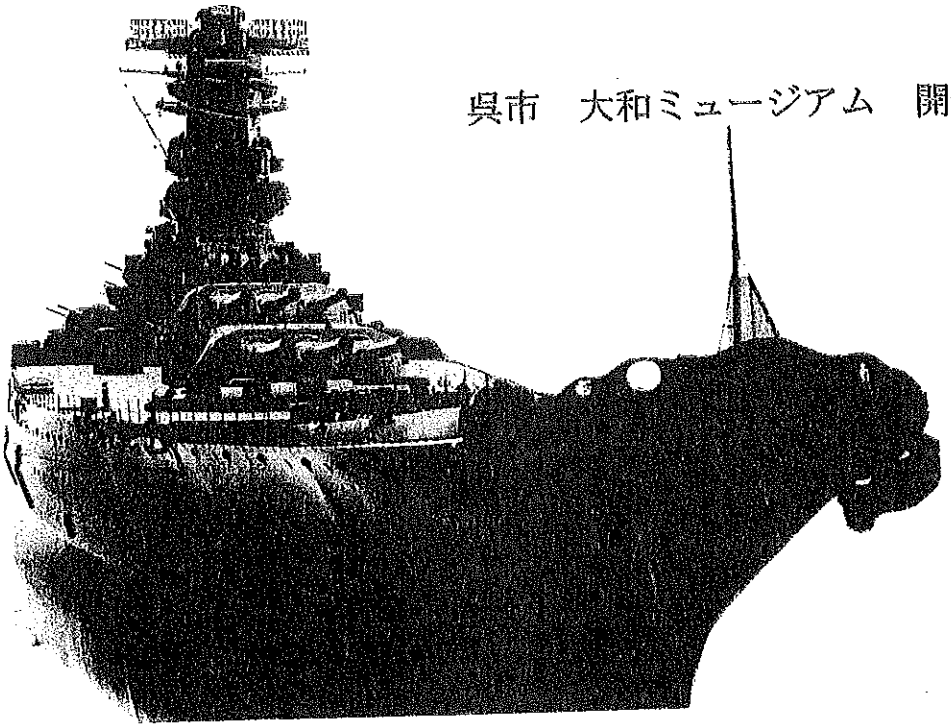
広郷土史研究会

会　報　第６９号

事務局　呉市広公民館内
〒737－0706 広古新開２丁目１－４
電話　71－0706　FAX73－5304
発行　平成17年８月２９日
広郷土史研究会編集委員会



呉市　大和ミュージアム　開館

大和ミュージアムに展示されている戦艦大和の勇姿。
平成17年4月23日、呉市宝町に戦艦大和の「呉市海事歴史科学館」として開設された。
この戦艦大和は昭和16年12月16日竣工、当時日本の技術の粋を結集した最新鋭艦。
太平洋戦争末期の昭和20年4月7日、沖縄特攻作戦において九州南沖、東シナ海にて、
米軍機の攻撃を受けて撃沈され、乗員3000余名の尊い命が大和と運命を共にした。
呉では大和の建造技術を継承して現在も世界最大級のタンカー等を次々に建造している。
この世界に誇る造船技術を披露する場とし、また不戦を誓うメモリアムとして運営される。
（写真撮影、当会会員　上河内良平氏）

目　次

広長浜地区　環境改善運動
「蚊とハエのいない町づくり」について　藤田一郎・・・・・２頁
［　終戦６０年記念特集　］
広工廠・十一空廠を中心に私の回想を交えて、荒本いく夫・・・・８頁
敗戦を偲ぶ第十一海軍航空廠発動機部の軌跡　檀　正二・・・・１８頁
回想　あの戦争　旧陸軍少尉、元陸上自衛隊將補　菊本　齊・・・・２２頁
例会報告　大新開一町田の里道と水路図　矢口一美・・・・３０頁

第６１回例会報告

さる７月24日（日）当会理事、矢口一美先生による「広島県賀茂郡広村水利組合第三地区の歴史と大新開の発展」と題する講演を頂いた。

幕末明治期からの大新開地区の農地に水を当てる水利権の歴史から始まって、歴代の会長の人物像にせまる興味の尽きないお話しであった。

この中で、広村の平野部の農地、特に大新開は一町角に整理整頓された真四角の農地が新開築調期から整然と整えられており、現在各地域で多額な費用をかけて行われている農地改良による、一筆が一町を超える大型の耕地が江戸時代中期にはすでに広村では出来上がっていたことを誇らしげに述べられた。

また、この一町角の正方形の農地の水の当て方、水路と里道の付け方は当時の農民の知恵を感じるものであった。

次に、戦前（昭和20年以前）広かんらん（キャベツ）が一世を風靡するほど広の農産物として多く栽培されていたが、この理由についてと江戸時代中期以降莫大な資産形成をして広村の経営に携わってきた庄屋多賀谷氏の没落原因について重大な示唆をも行われた。

この事に付いて前号で記述されていないので、ここで簡単に述べておく。

明治初期から10年代は夏の長雨が毎年のように続き、米の不作が長期間慢性的につづいた。

また、明治新政府による地租改正で全国的に農地の正確な実測がなされ、広村は税額が10倍近くに跳ね上がった。

そこへ明治17年８月25日、未曾有の台風に襲われ諸墾田の堤防が決壊して数百町にも及ぶ耕地が３尺余（約１ｍ）海水に没した。

これ以後明治末期に模範村として表彰されるまで、広村民は塗炭の苦しみを味わうことになる。

すなわち、堤防修復に莫大な借金を背負い以後、農地の塩抜きに手間取り賀茂郡一裕福な村は全くその反対の状況に陥ったのである。

村政は破綻し、村債の支払いのめどが立たないまま江戸時代からの広村の中心的資産家が没落していったのである。

多賀谷家の没落も村債の裏判にあったのではないかと推察された。

この時期、広村の村有物の多く（文書類も含む）が債権者に差し押さえられたり、競売にかけられて流出している。

これを救うべく登場したのが、塩に強い農作物「かんらん（キャベツ）」であった。

このキャベツを栽培することによって次第に農業経営は軌道に乗り、やがて「すいか」「うり」が栽培され、塩抜きが終わった所から「米作」が行われるようになったのである。

なんと復興に明治末期まで時間を要したのであった。

この明治期の困窮した広村の内情を語る時、しばしば用いられる逸話が広村の秋祭りの露天で販売されている広名物「いが餅」である。

それは他村から祭り見物に来たよそ者に、年に一度のお祭りの日にも「いも餅」を食べているのを馬鹿にされたくないばっかりに、芋の団子の表面だけお米を貼り付けた、すなわち、お米で芋団子を包んだものを食べていた名残が「いが餅」であったのである。

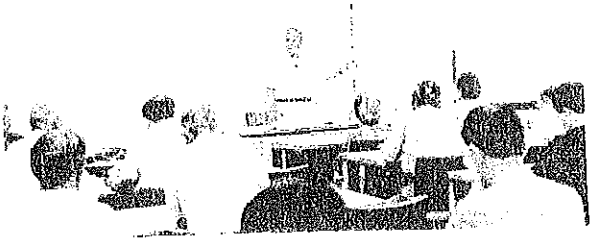
いまでは、広く呉地方の名物となって中も外も米餅であるが、お餅に色付けをした米粒を貼り付けた何とも紛らわしいお餅を「いが餅」と称して販売している。

秋祭りには必ず買って食べなければ祭りが

来た気がしないのは広村の因縁であろうか。

なを当日の参加者は下記の方々でした。

賀谷倭登・菊本斉・矢口一美・山中和子・丸山幸一・杉岡護・木村興一・鈴木千鶴子・山本一義・山本昭光・神垣時蔵・神垣敦子・大下二三子・大畑マサコ・吉本和子・村本スミヱ・新田正典・賀谷剛三・山本一明・内田基一・大倉正明・藤田一郎・亀井晃・新本龍義・船本昭彦・小栗康治・上河内良平、他1名の合計28名でした。



講演される矢口一美先生

当日聴講する会員各位

大新開一町田の里道と水路図

水は山側から海側へ流れるが大新開はこれを方向でいうと北から南へ水が流れる。

正確に1町田を正方形に作り、廻りに3尺幅の里道と水路をめぐらし東西の中央に3尺の水路を通し5反づづ1町を半分に分ける。

5反づづに分けた西側を南北に1反づづに畝を入れて分け、東側は東西に1反づづ分けた。(図1，参照)

水は南北に分けた田んぼには西から入れて東へ落とし、中央の水路に集めた。

東西に分けた田んぼには北から入れて南へ落とし1町田の廻りの水路に集めた。

田んぼの分け方は縦横交互に規則正しく並べて行くと全ての田んぼにまんべんなく水が当てられる。

水路には下流に行くほど背の高い板で水路をせき止めて田に水を引く。

これが大新開の農地に水を当てる方法であった。

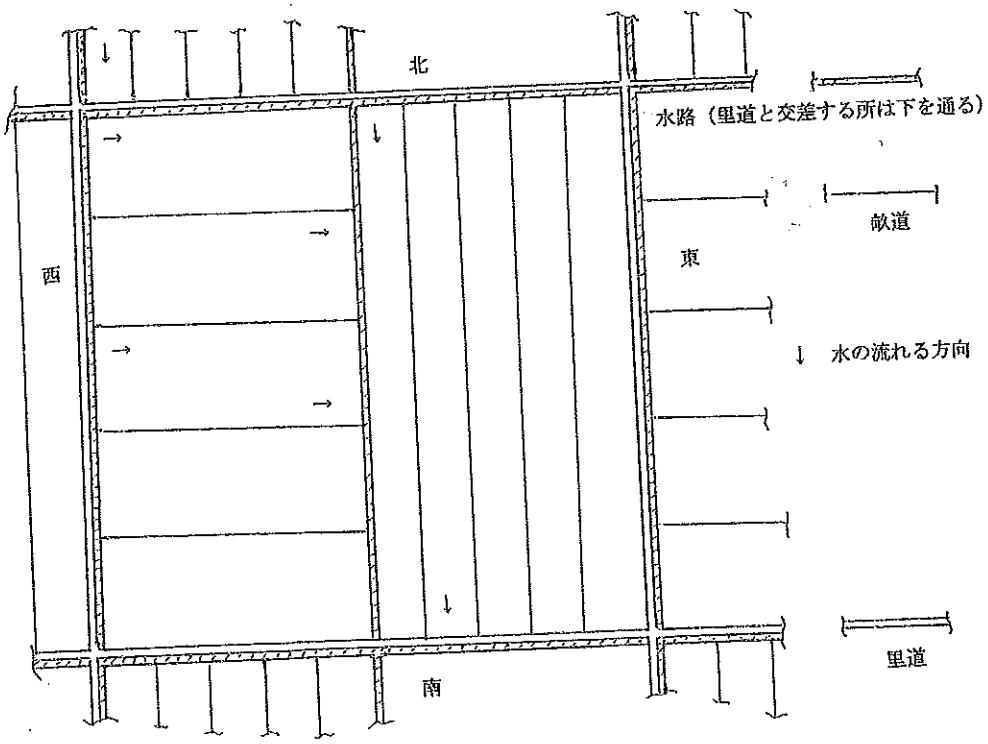


図1，大新開1町田の里道と水路（縦横の田んぼは全て正確に1反に分けられた）